

## 渡りたくない橋

中村 龍介

来月の終わりで満八十二歳になる。日本人男性の平均寿命は二〇二〇年の統計では、八十一・六四歳とされている。ということとは、私は既に平均寿命を満了し、後はオマケの人生ということだ。

若い頃、自分が八十歳を過ぎても、この世に存在している状況を想像したこともなかった。はるばる遠くまで来たものだと、一種の感慨さえ覚える。が、一方で少なからぬ不安もある。このまま何処まで行くのだろうか。

私の父は七十四歳で他界したが、七十を過ぎた頃から既に「徘徊」や「奇行」といった認知症の症状が顕著で、アルツハイマー型認知症との医師の診断が出ていた。母と相談して大阪にある専門の病院に入院させた。その頃、私はドイツに駐在していたので、入院のための手続きなどは、すべて母にお願いした。

六年間の駐在から帰国して、父を入院先の病院に見舞ったとき、私の顔を見るなり、父は相好を崩して叫んだ。

「おー、君は〇〇君だったね」

自分の一人息子を会社時代の部下と間違えているのだ。この時の私の絶望感を今もハッキリと覚えている。

父親のDNAを受け継いでいる私が、そうならないという保証はない。それが不安なのだ。

今、振り返ってみると、古希を過ぎた頃から私の物忘れがひどくなつたように思う。何度も経験した失敗として、車のキーの件がある。車で買い物に出かける前に、必要な品物を揃える。車のキー、免許証の入った財布、買い物袋、必要な買い物をまとめたメモ、マンションの鍵、マスク……。全てを持ったことを確認した積りで、マンションの戸締りをすませ、七階からエレベーターで下に降りる。更に、青空駐車場まで五十mほどを歩き、車の前まで来てドアのノブに手をかける。最近の車はキーレスなので、キーを身に着けていればノブに手をかけるだけで、ガチャツと音を立ててドアが開く。

が、ガチャッは聞こえず、ドアも開かない。慌ててズボンのポケットに手を入れて探す。が、ない！そこにあるはずのキーがないのだ。忘れ物の対象は、車のキーだけではない。行先によって必要な電車のパス、病院の診察券、マスク等々。その都度来た道を引き返して取りに帰ることになるのだが、肺の弱者の私には簡単なことではないのだ。

ところが、八十の大台に入った頃から、この忘れ物はもう少し性質が悪くなることがあるのだ。車のキーの場合、苦勞して我が家に戻り、玄関に靴を放り出して、キーの定位置・書斎の本棚に取り付けたフックに辿り着くが、そこには何もない！前回外出から帰ったときのことを思い出そうとするのだが、それが容易には思い出せないのだ。

一般に、「忘れてしまったことが自覚できるのは健忘症で、認知症では、前回買い物に行ったこと自体を忘れている」と言われる。私のケースはそこまでいかないが、健忘症よりは少し進んでいるように感じる。

目を閉じて、ある情景を想像してみる。  
 私は、今、「健忘症の島」から「認知症の島」に架けられた吊り橋の上をゆっくり歩いていて、前方の「認知症の島」の入口に架けられた標識がだんだん大きく見えるようになってきた。：「嫌だ！こんな橋、渡りたくない！」と、慌てて正気に戻る。

【二〇二二年八月記 原稿用紙約四枚 課題「橋」】

